

## 留学から得られたこと —中国・アメリカ・日本の留学生の声—

高橋 卓也 (環境政策・計画学科)  
李 光 (2006年度環境科学研究科博士前期課程修了、現在北京阿斯環境工程有限公司取締役)  
ブルック・ホルマン (米国ミズーリ大学在学中)  
山元 周吾 (環境科学研究科博士前期課程在学中)

今回の特集にあたって、私(高橋)が関わった留学生3名に寄稿をお願いしました。一人目は李光さん。2006年度に本学大学院を修了した、中国からの留学生です。二人目は、ブルック・ホルマンさん。米国からの留学生で、ミシガン州立大学連合日本センター(彦根市松原)の短期留学プログラムに2012年度に参加したアメリカ・ミズーリ大学の学部生です。三人目は、日本人の山元周吾さん。本学大学院に在学中で、2012年度にはドイツの森林組合でのインターンシップを体験しました。それぞれの寄稿に対し、高橋からのコメントを付け加えます。

### 李 光

#### 1. プロフィール

氏名：李 光

国籍：中華人民共和国

学歴：滋賀県立大学大学院

環境科学研究科 修士

略歴：

1999年4月 就学生として来日 日本語学校で学ぶ

2000年10月 京都精華大学 ISO14001 環境マネジメントシステムについての専門知識を学ぶ

2005年4月 滋賀県立大学大学院 日中両国での環境マネジメントシステムの制度・実態両面での共通点・相違点について研究

2007年4月 大塚グループ「アース環境サービス株式会社」入社  
事業内容：食品関連工場・医薬品/化粧品関連工場・店舗での環境由来による製品への異物混入防止・汚染防止を目的とした総合的な環境衛生管理の技術支援サービス

2013年1月 アース環境サービス株式会社海外プロジェクト担当  
北京阿斯環境工程有限公司 取締役

#### 2. 大学院での研究、学んだことについて

みなさん、こんにちは！滋賀県立大学大学院2007年度卒業生 李 光(リ コウ)と申します。私は、14年前に日本に参りまして8年間日本で学問の道を歩き、現在は大塚製薬グループでのアース環境サービス(株)および北京阿斯環境工程有限公司に

勤務しております。

今回は、滋賀県立大学大学院の卒業生として、このような機会をいただきましてありがとうございます。環境科学部(高橋先生)のご依頼をいただいているから、皆様にどんなお話を申し上げるべきであろうかについてずっと考えて参りました。

私は多くの滋賀県立大学の卒業生の中の一人として、また多くの先輩たちの中の一人として、学生の皆様にお伝えたいという気持ちから、滋賀県立大学で学んだことから始め、現在の仕事、私の故郷、日本留学のきっかけなどについて、述べさせていただきます。

私は、2005年4月に滋賀県立大学大学院環境科学研究科に入学致しました。修士論文の題目は「中国におけるISO14001導入の現状及び中国に進出している日系企業の環境マネジメントシステムへの取り組み実態研究」というものです。大学院での環境計画学についての博士前期課程の専門教育を基礎として、日中両国での環境マネジメントシステムの制度・実態両面での共通点・相違点について研究してまいりました。

大学院での学問は、学部で習得した知識や経験を活かしてさらに高度な調査・研究を行うことです。高橋先生のご指導のもと、中国現地へ足を運び、現地の実態研究や日本での学会論文発表会にも参加させて頂き研究を深めました。このような大学院での勉強・研究・体験を通じて自らの専門知識を強化充実させ、自分の研究活動から実社会に役に立てる自信と意欲という宝物を獲得しました。

大学院での自分の研究活動の経験を活かして、日本での就職ができました。

職務内容として、企業の総合環境衛生管理という技術コンサル支援を行っております。具体的には、

人々の健康に関わる、医薬品・食品・化粧品・トイレタリー・容器包装分野の製品を、環境由来の汚染や異物混入から守り、また、医療機関における環境由来の院内感染防止を目的とする、総合的・体系的な総合環境衛生管理支援を行っております。

現在は、中国現地企業の総合環境衛生管理支援として、現地法人会社の責任者として活躍しております。

次は、私の故郷についてですが私は中国の吉林省から参りました。中国では日本語を専攻し、卒業した後、中国の日系企業で1年半余り勤めておりました。日本留学を決めた理由は、若い時にもっと大きい世界に行って、自分自身をもっと大きく成長させてあげたかったからです。もちろん、「わざわざ海外にいて苦勞するな」と両親や周りの人々から強い反対をされましたが、自分の夢を叶えるために、思い切って来日致しました。就学生として日本語学校から留学生として大学、大学院まで8年間の勉学の道を歩んでまいりました。

当初、他の留学生と同じように、来日したばかりの時は、いろんな壁や困難がありました。今繰り返して思い出すと、その全ては私にとって、とても貴重な学びであり、大事な経験でした。日本留学を含めて、自分が今まで歩んできた一步一步の後、やっと新たなスタートに辿りついたということで、胸が熱くなります。

これからは、周りの人々を助けながら、社会に貢献していきたいと思っております。

以上

(高橋からのコメント)

環境科学部での修士研究は、中国からの留学生にとっては、非常に挑戦的だと思います。李さんに所属してもらった、地域環境経営研究部門では実証的な研究が求められます。私は、中国からの留学生には、独自性のある研究を目指してもらおうということで、中国での事例を対象として研究することをお勧めしております。私の研究室では企業の環境経営を一つの研究テーマとしておりますが、中国の組織、とりわけ企業に、聞き取り調査、アンケート調査の協力をえることは至難の業です。政治・社会体制からくるものでしょうか、協力を拒否されることがほとんどです。たとえば、日本で企業を対象としたアンケート調査をすれば、20～40%の回答率が期待できますが、中国では5%にはまず満たないと考えた方がよさそうです。李さんは、そうした状況下、独力で調査対象を開拓し、深く踏み込んだ聞き取り調査を実施しました。

このような「道を切り開く力」を活かして、現在、勤務の会社の中国展開の主力として活躍しておられます。私としては、そこで学んだ経験をゲストスピーカーとして本学の授業でご披露いただいたり、または中国でのビジネスについて、私自身の認識を正してもらったりすることができるのではないかと大いに期待しております。本学の日本人学生にも、こうした「道を切り開く力」を積極的な留学生からぜひ学んでほしいと思っております。



筆者 (李)



北京阿斯环境工程有限公司の所在するビル

## ブルック・ホルマン

留学によって私の将来に関する選択肢が広がったと共に、他の場所では得られなかったであろう文化知識を身に付けることができました。ミシガン州立大学連合日本センター（JCMU）と滋賀県立大学の共催による環境プログラムを受講して、私は、人生が変わるような経験をいくつもしました。これらの経験を、私は、いつまでも大切に心に抱き続けることでしょう。夏季プログラムの前半では、木曜日以外の平日に、日本語の集中講義を受けました。この講義のおかげで、土地の人達と意思の疎通ができるようになり、お店で食料雑貨・その他必要な品物を買えるようになり、また、後に経験するインターンシップでは、ここで学んだことが大いに役立つこととなりました。木曜日には、プログラムの他の受講生達と一緒に、JCMU が用意してくださった自転車に乗って滋賀県立大学へ通い、環境に関する4時間の講義を受け、琵琶湖に影響を及ぼす諸要因について学びました。毎回、別の先生に教えていただいた琵琶湖に関する各講義は、どれも皆、大変有益なものでした。私は、少人数のクラスで本当によかったと思います。皆、先生に質問したい時に質問することができたおかげで、しっかり講義の内容についていけたからです。私は、期待していたよりもはるかに多くのことを学びました。しかも、アメリカに戻ってから受けている講義のいくつかでは、同じような題材を扱っているのです！ 私達は、また、滋賀県立大学の先生方や職員の方々の引率で、学習経験を深めるためのフィールド・トリップにも行きました。竹生島へ行って、お寺や神社を訪れたり、琵琶湖博物館へ行ったり、山門 [やまかど] 水源の森でハイキングをしたりしました。

プログラムの後半では、インターン受け入れ先の先生を選ぶことができました。私は、米国、日本およびドイツにおける外国人による森林所有について調査を行い、17ページのレポートを作成して担当の高橋先生に提出しました。調査用として素敵な机とパソコンを用意していただき、何か困ったことがあった時には、研究室の他の学生さん達が助けてくださいました。私は、事前に日本語の講義を少し受けただけだったので、皆さん、私の言葉の障壁について大変配慮してくださいました。この調査に加えて、私は、インターンシップの一環として、前にフィールド・トリップで行ったことのあった山門水源の森でボランティアをさせて欲しいとお願いしました。そこでは、データの収集、歩道の補修、森に

生育する種々の樹木の観察や記録、様々な場所にある水源のpH測定などのお手伝いをして、森林ボランティアの日常活動に参加しました。森でのボランティア活動の間は、ほとんど日本語でコミュニケーションをとらなければならなかったもので、すごく大変でした。実地のボランティア活動を行い、森をじかに見た経験は、高橋先生に提出したレポートを書いた際に活かされました。そのような経験がなければ書けなかったような詳細について記述することができたのです。

アメリカへの帰国後、私は、森林、特に樹木、そしてボランティア活動の機会について、もっと学ぼうと決意しました。私は、現在、Treekeepersというプログラムの一員です。このプログラムでは、樹木の植え方や手入れ、それに様々な樹種についての基礎を教えてくれる3回の無料講座に出席した後、コロンビア市（アメリカ・ミズーリ州）のために36時間の奉仕活動を行います。

将来、私は、できれば日本に戻って英語を教えたいと考えています。それがかなったら、滞在中に、また調査やボランティア活動をしてみたいです。滋賀県立大学でのインターンシップ以来、その領域への関心が高まったからです。今度行く時には、樹木や森林、日本語、政治問題などについて、もっと知識を身に付けていたいと思います。

私の滋賀県立大学での経験は、とても思い出に残るものとなりました。すべての先生方が、私達プログラム受講生の理解を確認しながら講義を進めてくださり、私達は、大変歓迎されていると感じることができました。書いてある言葉が全く読めず、その国の言葉で人々に話しかけることもできない他国へ行くというのは、あるいは不安なものかもしれませんが、しかし、滋賀県立大学では、私は、歓迎されていて居心地がよいと感じました。私は、お世話になった素晴らしい先生方や、インターンシップで指導してくださった方々に、大変感謝しています。日本での滞在を、楽しく、学ぶことの多かった思い出として、私は、いつまでも忘れないでしょう。

（以上は、高橋が英語より日本語に翻訳しました。）

（高橋からのコメント）

ミシガン州立大学連合日本センター（JCMU）の短期プログラムでは米国各地からの留学生が、日本語とともに環境科学、日本文化について集中的に学んでいます。ホルマンさん以外の留学生も環境科学部でのインターンシップを楽しみつつ、かつ充実して体験しております。私がホルマンさんについて特に感心したのは、インターンシップ先を自分で「開

拓」したことです。山門水源の森には、フィールド・トリップ先としてまず訪問したのですが、その際に、水源の森を管理している NPO（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）の方々と仲良くなり、インターンシップをさせていただくこととなりました。猛暑の中2週間もの間、NPOの方々がびっくりされるくらい熱心に水源の森の監視・管理活動に取り組んでもらいました（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会の皆様、とくに藤本秀弘氏に感謝申し上げます）。私の研究室内での調査も積極的に進めて、力作レポートをまとめてもらいました。

JCMU 短期プログラム留学生は、学内の英語サークルとの交流、剣道部での剣道体験など、さまざまに学生との交流を進めており、本学国際化の一つの大きな流れといえると思います。



筆者（ホルマン）



筆者（ホルマン）

## 山元 周吾

私は大学院でドイツの森林管理について研究しています。そのきっかけはドイツへの交換留学でした。毎週のようにアルプスを中心に登山する中で、南ドイツの大自然に囲まれる美しい森林の姿に関心をもつようになりました。環境科学部に入学した当時から、学生だからこそできることを探し、環境問題の視点から積極的に学外にも学びの場を請いました。関心のある分野で働く多種多様な人達と接していく中で、特にインターン研修は良い機会になりました。私は学部生の頃を合わせると3度インターン研修をしています。つくばの農村工学研究所では地域資源の管理について、林野庁の近畿中国森林管理局では国有林の管理と国民の生活との関係について、そしてドイツの森林組合では森づくりに関わる多様な主体と森林経営をテーマとして研修に取り組みました。

私がドイツで研修した森林組合は、バイエルン州の田舎にあります。バイエルン州はドイツの中でも特に農業や林業が盛んで、自然豊かな州です。州土の半分は農用地で、35%は森林に覆われています。南ドイツの森林は今も針葉樹林が多いですが、広葉樹も育つ混交林化が着実に進んでいます。暴風による倒木や生物多様性の保全、森林の休養機能を意識した森林経営がなされているようです。ドイツでは森林をレクリエーションの場として捉えている人々が多いように感じます。林業と関係のない一般市民でさえ、休日にはウォーキングを楽しむために森林へ出掛けます。研修では林業作業員や森林管理局の人達ともよく話しましたが、多くの森林所有者と出会えたことがよかったと思います。組合員でもある森林所有者は、森林組合や森林官と現地に赴き、森林をどのように管理するのか相談します。「木を切り出すための道をつけたい」や「広葉樹を混ぜ災害に強い森にしたい」などの要望や「どこから切ればこの環境を壊さず木材生産ができるのか」などの相談が毎日のようにあります。多くの森林所有者は、森林を所有していることや美しい森を管理することに誇りを持っているように感じました。

私の研修期間中に、先代からオーストラリアに移住したある組合員が、持っていた森林を森林組合に譲るという出来事がありました。その頃、組合は木材を利用した熱電供給設備を売却して得た資金をどのように使えば組合員にとってより良いものになるのか、について議論していました。そこでその資金で森林を購入し、その森林は木材生産をすると共に、教育林やレクリエーションのための利用を目指すこ

とにしました。バイエルン州では組合自体が森林を所有するということが今までなかったので、多面的な利用を目指すことも相まって地元でもちょっとした話題になりました。譲渡式は森林の前で大々的に執り行われ、町長や地元関係者も参加してビール片手に森林がもたらす恵みの可能性を祝いました。海外でのインターン研修は、国内の研修とも海外留学として大学で講義を受けることとも、また違う経験をする事ができると思います。

私がドイツで活動するにあたり、独日協会との関わりが大きな影響をもっていました。バイエルン州には7つの独日協会があります。独日協会は日本祭りや新年会などのイベントを通して、ドイツと日本の交流を奨励し、相互理解の促進を目的に活動しています。私のインターン研修も独日協会の支援を受け、無事に終わることができました。また、長浜市はアウクスブルク市と50年前から姉妹都市の関係にあります。交換留学制度もこの関係がきっかけで始まりました。毎年、両市は青年使節団を中心に国際交流を積極的にしています。2012年8月には長浜市からの使節団がアウクスブルク市を訪問しました。使節団に参加した学生はホームステイが体験でき、最終日にはフェアウェルパーティがありました。私も研修中でドイツに滞在していたので、交換留学生だったこともありパーティに参加することができました。このような国際交流とそれに関係する人達のおかげで私もここにいるのかなと実感しました。

海外で活動する際に、言葉のニュアンスや生活文化の違いは外国人にはとても難しいものです。グローバルとはただ海外に開かれた状態を形成していくことではなくて、そういった異文化をひとつひとつ理解していくことだと思います。基礎知識を身に付ける座学も大切ですが、現場を実際に見て、感じ

て、体験し、考えることも大切だと思います。これは学術研究でも同じことが言えるのではないのでしょうか。私は幸運にも多くの人達と出会い、海外でも現場を見る機会を得ることができました。どこの組織にも属さず（もちろん大学という組織には属していますが）やりたいことを追求できる、それが学生だからこそできる特権だと思います。私がこれまで得た経験は、今では修士研究として繋がっています。

(高橋からのコメント)

ドイツの林業は、日本の森林・林業政策を巡る議論のなかで、熱い視線を集めております。前・民主党政権下で打ち出された「森林・林業再生プラン」(2009年12月)策定のなかで、一種のモデルとして、ドイツ・オーストリアの林業が取り上げられたからです。ドイツ・オーストリアのような活力ある林業を日本でも創り出そうというのが、その目指すところですよ。(2012年12月の自由民主党への政権交代の後も、この大きな流れは残ると思われま)

山元さんは、いろんな偶然の出会いから、このドイツの林業に巡り合い、現在の研究テーマにまで結びつけるところまでたどり着きました。ドイツの森林組合の方々、独日協会の方々から、多くの助けを得られているのは、山元さんの闊達な人柄と思考の論理性によるところだと思います。滋賀県はドイツ・バイエルン州と、長浜市はアウクスブルク市と、それぞれ姉妹県市・姉妹都市として、交流を積み重ねてきました。滋賀県立大がそのご縁を借りて、アウクスブルク大学と学術交流協定・学生交換協定を締結したことも、山元さんの体験のきっかけとなったと言えるでしょう。ところで、山元さんは学部時代には第2外国語としてドイツ語を選択していませんでした。交換留学前にドイツ語の能力を急速に身に

付けるにあたっては、本学でドイツ語を教えておられる吉村淳一先生(人間文化学部国際コミュニケーション学科)の特訓のおかげがあったことも申し上げておきたいことです。

ドイツの森林・林業というこのテーマを山元さんの将来のキャリアに結びつけるため、滋賀県・県内諸団体・滋賀県立大学の資源・ネットワークを利用し尽くしてほしい、と思います。



筆者(山元):バイエルン州の森林を背景にアルプス登山



筆者(山元):ドイツ・バイエルン州の森林管理者といっしょに